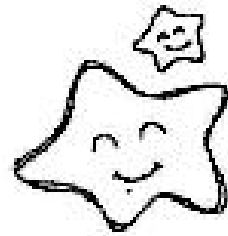


QSK

にぬふあぶし

No.298 ^ね子の方向の星(北極星)



宜野湾市地域活動支援センターはぴわん便り

10月29(金)、宜野湾市地域活動支援センターはぴわんでは、「GOGO ドライブ」のプログラムで、はぴわんメンバーと職員で名護市にあるネオパーク沖縄へお出かけしてきました。緊急事態宣言発令中は、はぴわんでも外出自粛を行っていたため、毎月1回ははぴわんメンバーが行きたい場所を決めて、そこへ出かける「GOGO ドライブ」も中止となっていました。

コロナ感染状況も落ち着きを見せた10月末頃、県内では緊急事態宣言が解除になり、はぴわんメンバーが待ち望んだ「GOGOドライブ」が実現しました。

これまでは「外出自粛」が呼びかけられていたため、はぴわんメンバーは「以前のように気軽に出かけられない」ストレスが沢山あったと思います。

久しぶりに外に出て自然の中で動物と触れ合った方々は、とても解放感にあふれて伸び伸びとしているように見えました。

あっという間に2時間半が過ぎ、はぴわんメンバーからは「時間が足りない、もう少しゆっくり楽しみたい」という声も沢山ありました。

日々、自分らしく過ごせるように、コロナ禍に負けず頑張っている皆さんが楽しめる、はぴわんプログラムを毎月欠かさず提供できればいいなと思いました。



“こどもびあとヤングケアラーを考える” 沖福連 家族大会 2021 のあとに

増山 幸司

職場でも SNS でもなんだかんだ言って、「家族」という立場の人よりも、「当事者」という立場の人たちのほうが、身のまわりにたくさんいる。

今回、こどもびあやヤングケアラーについての研修会を企画したとき、「まるで障がい者が親になることを責められているみたい」だとか、「もし親になったとき、自分も同じように子どもを苦しめてしまったらと思うと、辛くなる」だとか、そういう声も自然と集まってきて、心の片隅ではそれらが常に持続低音を鳴らすことになった。

*

相変わらず、「家族」が多くを背負わされすぎている。

社会に担いきれないことがあると、なんでもすぐ家族の責任に帰されるところがあって、それは制度として「私宅監置」が行なわれていた頃からちっとも前には進んでいない。

「個人」を扱うとき、必要ないように思えることでも、いつでも「家族」がセットにされている。生活保護の扶養照会の手続きひとつとってもそうだし、コロナの給付金を世帯主ごとに申請することもそうだし、ある人が罪を犯すとその家族までが謝罪を求められたりする理不尽からも、「身内でなんとかすることが当然」という、この国の伝統的な文化が後景にうかがえる。

こういう内面化された慣習や考え方は私たちのなかでぜんぜん変わっていないものの、一方で伝統的な家庭、伝統的な地域社会みたいなものがどれだけ残っているかはわからない。セーフティネットとしての地域共同体はとっくに機能をなくしたし、家庭では核家族化や少子化、晩婚化、ひとり親世帯の増加も進んでいる(ちなみに近年、沖縄での離婚率は全国 2 位の 45.8%で、2 組に 1 組弱のパートナーは離婚しているらしい/2018 年「人口動態調査」厚労省)。

ことほどさように家族の様態は移り変わり、ますます多様を示してきている。

コンビニや保育園や学習塾やブライダル産業やホームヘルパーやスマホやその他諸々の社会資源によって、家族機能はほぼほぼ外部化されてきたようにも感じるが、それでも「こうあるべき」という家族の呪いだけは祓われることなく、そこ・ここに気配を残している。

この呪いの正体というのは、たぶん地域共同体の残滓としての「世間の空気」である。

見えない空気に抗うことは簡単ではないはずだけれど、これの呪縛に挑むことこそ、「大人の責任」であり、「社会の責任」でもあると個人的には考えている。

(次のページへ続く)

(前のページから)

さて、国が来年度から、「ヤングケアラー」普及啓発キャンペーンを予定しているという。

思い出すことに、以前「アダルトチルドレン」という言葉が世の中に広がったことがあった。原義的には「アルコール依存症の親に育てられて成人した子ども」のことで、やがて「機能不全家庭で育ち、生きづらさを抱えた人」という意味合いにも派生した。

一時的によく耳にしたこの「アダルトチルドレン」も、言葉の響きなどからさまざまな誤解を振りまきつつ、いまやメディアに登場することもすっかりなくなってしまった。

「ヤングケアラー」を取り巻く議論も、これを一過的なもので終わらせないようにしなければならない。継続的な情報発信が大切になるし、そのうえで、実際の経験当事者が、顔や名前や肉声を通して自身の思いを届けることの意味合いは大きい。

名付けられた属性でひとくくりにはされる概念ではなく、「どういう人がどういうふうにいるか」という、その個別的な理解が大切になるはずである。

それで、困っている子どもがいたら、きちんと向き合って話を聞くことは、条例や法律など以前の「大人の責任」と思うのだけれど、家族を覆う分厚い呪いの層を踏み越えて進むためには、ときにそういう条例のような社会的強制力を利用することも必要になるかも知れない。

*

ところでぼくの母親は生前、極度の仕事人間で、ろくろく家にもいないし、たまにいてもだいたい仕事の電話ばかりしているような人だった。必要があれば深夜過ぎでも起きだして、片道30分以上も田舎の真っ暗な道を運転して職場に出かけていった。振り返れば明らかに「家族」を犠牲にしている人だったが、仮に時間が戻ったとしても、母に生き方を変えてほしいとは特に願わない(かといって、自分も同じように生きたいとはぜんぜん思わない)。

どうしてそんな生き方が成り立ったかと言えば、もちろん周囲のサポートがあったからだし、それだけ母がまわりを頼ることが上手かったからだと思う。

「家族」は条件付きのものではないし、「家族」だけで抱えなければならない問題なんていうものも、本当はひとつもない。ぼく自身のなかにも、「こうあるべき」がたくさんくすぶっているからこそなお感じることに、常識を手放すことを怖がらないようにしたい。



家族大会2021 報告

ZOOM チャットから寄せられた感想より

◆ 親の立場でも子供の立場でも、病を抱えている当事者自身だけでは無く、それぞれ立場の違う当事者の方の生の声をゆっくりと聞かせていただく事は、精神科医療従事者には広く必要なことだと思います。同じような会を何度でも、定期的にも、年数回でも開催していただける事はいろんな意味で有意義だと思います。よろしくお願いします。

◆ 絶対的な存在であるはずの親が、(こどもから見ても)おかしい行動をとったり、暴力を振るったり、自傷する姿は、こどもにとってどれほど怖くて存在を否定された気持ちになるかを知りました。発表を聞きながら、当時の経験や今の思いをここまで話せるようになるのに長い道のりがあったのだろうな、と想像すると涙が出てきました。また、あいかさんの「みんなが、あんじゅを好きだということをお忘れないで」というコメントを聞いて、はぴんちゅがお互いに助ける・助けられる関係になっており素敵なグループだなと感じました。私も精神疾患を支援する職種として、地域の一員として、ヤングケアラーの方々へ思いを寄せつつ、活動が広がるよう協力していきたいです。これからも応援しています。

『家族大会に参加して』 読谷村家族会 会長 當山幸子

- 統計がないから問題
- 情報がない、隠すのが問題、話す場がない
- 探求していくと問題がいっぱい出てくる
- 苦しんでいる人がいっぱいいる。平和で生きていくためにどうしたらいいか？
- 日本はドイツ・イギリスに比べ、先進国とはいえない
- イギリス→ファミリーワーク 2017年 メリデン版訪問家族支援の普及
- アクションを起こしていく
- JICA 国際フォーラムへの参加
- 子どもの気持ち、すべての立場、社会と大人がどうしていくか？

現在、家族会の会長をしていますが、このことに息子は反対しています。

お父さんが会長をしていて、「家族会の灯りを消さないで」との遺言、だから息子に理解してもらいたい、と会長を続けています。

母親亡き後は、一人息子なのでお嫁さん募集中ですが、自立して暮らしていけるように、方向性を間違わないように、二人で向き合って静かに暮らしています。

偏見と差別の中で、打たれ強くなりました。

家族会は仲良く楽しく元気に続け、自分がやれることを計画し、頑張っていきたい!

「みんなねっと精神科医療への提言」 Part 4

4. 当事者の視点を大切にする精神科治療へ

① 薬物療法を受けた本人の意見の尊重と治療・研究への当事者・家族参加の推進

～薬物療法の改善・創薬へ活かす

薬を実際に飲んでいる当事者の服薬を通した体験、そして当事者とともに暮らしている家族からの声を、薬物療法の改善や創薬に活かしていくことを求めています。また、当事者・家族と研究者が対等に意見を交わせるような研究環境の整備を求めています。

② 身体的ケアの重視～身体的健康無くして精神的健康無し

精神疾患になると、その影響により自分自身の身体的健康に注意を払ったりその維持に努めることが難しくなります。診察で、精神症状だけではなく身体的ケアにも留意する精神科医療であることを求めています。

③ 診断名による混乱の是正を～診断名の伝え方に配慮し診断体系の見直しを

いまだ精神疾患の原因は解明されておらず、科学の進歩に応じて診断体系の見直しも始まっています。精神科を受診するたびに診断名が変わり混乱した、という経験を持つ当事者・家族は少なくありません。診断名を伝える際にこうした事情を医療者がまず当事者・家族に説明すること。そのうえで、ひとり一人の患者さんごとの症状や経過の特徴を明らかにし、診断名が当事者ごとのより良い治療に結びつくものとなるよう努めることを求めています。

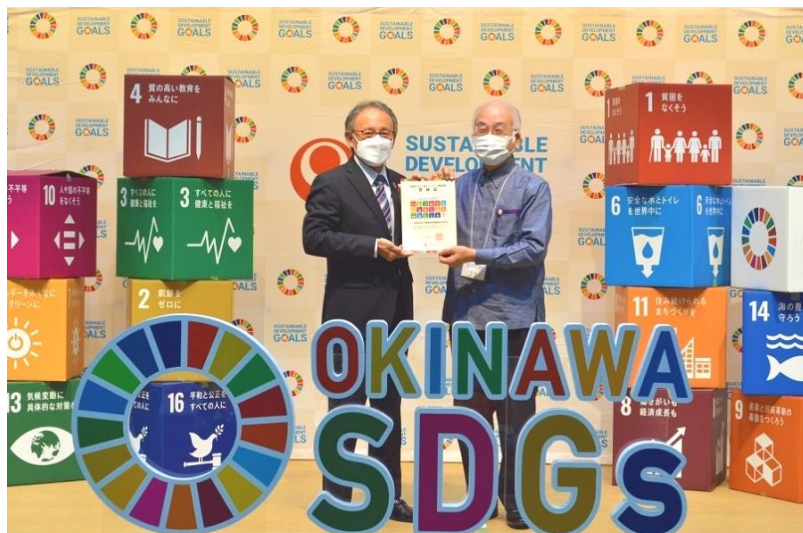
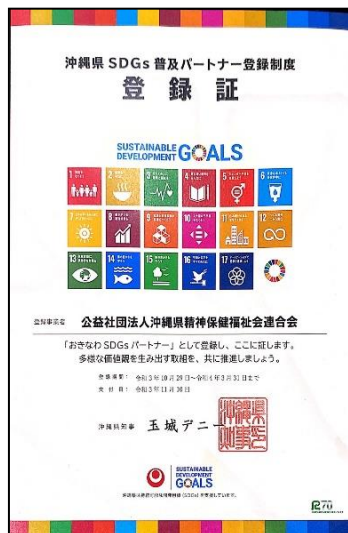
Check!

精神疾患の原因や治療法など、現在もまだ解明の途上です。医師も製薬会社も、誰もまだ間違いのない「答え」など持っていないことを認識することが必要だと感じます。そのうえで、研究の旅路では当事者の声が必要になってくるはず。適切な科学の発展のためにも、実際の精神科医療ユーザーがしっかりフィードバックを行なえる仕組みづくりが求められています。(増山)

以上、4回に渡って「みんなねっと精神科医療への提言」を紹介してきました。

詳細はみんなねっと(全国精神保健福祉会)のホームページにも掲載されています。また、紹介した4項目以外にも、「入院中心から地域医療への転換を」として、長期的展望からの具体的な目標の提言も書かれているので、ぜひ確認してみてください。

『おきなわ SDGsパートナー』の登録式がありました



11月10日(水)、沖縄県市町村自治会館にて『おきなわ SDGs パートナー』の登録式があり、新しい登録団体のひとつとして沖福連もこれに参加してきました。

SDGsは「Sustainable Development Goals(持続可能な開発目標)」の略称で、2015年9月に国連サミットで採択され、国連加盟193か国が2016年から2030年の15年間において達成するために掲げた目標です。

この開発目標を簡単に言えば、さまざまな事業活動において、人や環境をなおざりにすることなく、「いますぐ」ではない将来、また次の世代のことも視野に入れながら進めていくという考え方です。

美味しいからと偏った食事を続けていると健康を害して自由な生活ができなくなるように、また楽しいからと夜通し居酒屋で騒いでいると、明るく日は二日酔いで台なしになって、日々のお小遣いにもやがて困るように、目先のことで動いているとうまく先が続きません。

沖福連でのSDGsを踏まえた取り組みも多岐に渡るのですが、わかりやすく言語化できる部分についてはホームページでも発信しています。『パートナー』登録によって、他の団体などとも連携しながら、また広くSDGsの普及推進に取り組んでいければと思っています。

式では玉城デニー知事が、出席した企業・団体の代表らへ登録証を直接、手渡しました。

編集後記：宮古島で唯一のボウリングセンターが年末で閉館になります。以前からボウリングの要望が出ていたのでこの機会にみんなで行ってきます！私は20年ぶりぐらいでしょうか・・・どんなスコアが出るのかある意味楽しみです。瓶コーラの自動販売機はあるかななんて、子供時代の思い出も蘇ります。Y・O

編集：公益社団法人 沖縄県精神保健福祉会連合会
会長 山田 圭吾
〒901-1104
沖縄県島尻郡南風原町字宮平 206-1
てるしのワークセンター内
電話 098-889-4011 FAX 098-888-5655
E-mail terushino@castle.ocn.ne.jp
発行：九州障害者定期刊行物協会
〒812-0044
福岡市博多区千代 4-29-24 三原第3ビル3F
電話 092-753-9722 FAX 092-753-9723
定価：10円(会費に含まれる)